

「死も及び無し」(Ⅲ)

——後世の見たマロ——

伊 藤 進

Ⅲ 18 世 紀

18世紀にマロがどのように読まれたかを探るにあたって、まずピエール・ベールをもう一度引用することから始めたい：

L'incomparable la Fontaine, qui s'est reconnu son Disciple, a contribué beaucoup à remettre en vogue les Vers de cet ancien Poète. Une infinité de curieux cherchoient ses Oeuvres avec ardeur, & avoient bien de la peine à les trouver. C'est ce qui a obligé un Libraire de la Haie à les remettre sous la presse. Cette Edition est très-belle.⁽¹⁾

ヴォルテールをして「思考の方法を教えるものの嚆矢」(『ルイ14世の世紀』*Le siècle de Louis XIV* [1751], 第32章)と言わしめた『歴史批評辞典』のマロの項目に見える条りであるが、ベールの記述から2点の事情が明らかにされよう。ひとつは、マロの弟子を自認する「比類なきラ・フォンテーヌ」が師匠の詩を再び流行らせるのに大いに貢献したことであり、ふたつめは、このため多くの好事家がマロの作品集を入手しようと奔走しているもののなかなか探し出しえず、ついにハーグの某書店がマロ作品集を印刷に付して読者の要求に応えようとしていることである。第一について言えば、ベール以前の如何なる文人も指摘しえなかったことであり⁽²⁾、その意味からも非常に興味深いものがある。第二については、マロ

(1) P. Bayle, *Dictionnaire historique et critique*, op. cit., t. IV, p. 152.

(2) Cf. W. de Lerber, op. cit., p. 13. 併せて拙稿「「死も及び無し」(Ⅰ)——後世の見たマロ——」, 『中京大学教養論叢』第23巻第4号, 1983 (以下拙稿(Ⅰ)と略記), 634頁をも参照されたい。

への関心が18世紀に入ってもいっこう衰えを見せていないことを私たちに教えている点で看過できない。17世紀には、若干の詩華集を除いて、1615年を最後にマロ詩集は出版されなかった⁽³⁾。したがって絶版等の諸事情により、作品集はもはや入手し難くなっていたかもしれない。ところがマロの人気は衰えず、この関心がオランダの書店に作品集を再版させるべく決意させたのである。事実、1700年とその2年後にそれぞれハーグの書肆(Adrien Moetjens)が2巻本のマロ作品集を上梓している⁽⁴⁾。さらに1714年にはパリで刊行され、1731年にラングレ=デュフレノワによるマロ作品集——4折判で4巻、12折判で6巻から成る——が出版されるという具合である⁽⁵⁾。こうした読者の要求に応えるべくマロ詩集が相次いで上梓されたことは、マロ詩を「文芸共和国」により普及させることになっただろうし、じかに作品を味読することを可能ならしめたであろう。ベールの記述はこのあたりの事情も窺わせるものであったのだ。

同様に、ジャン=バチスト・デュ・ボス Jean-Baptiste Du Bos (1670-1742) も、言語上の変化もものかはマロが18世紀になお愛読されたことを証言している。この批評家に依れば、マロが才能の領域内——それは所詮小品にこそふさわしいとデュ・ボス師は周到にもマロの才能を限定するが——で書いた作品は心愉しく読め、フランソワ1世の時代の詩人たちの中でも、マロとメラン・ド・サン=ジュレーの詩篇だけが今なお鑑賞に耐えうるのである⁽⁶⁾。

(3) 拙稿(Ⅱ), 631—632頁参照。

(4) Cf. W. de Lerber, *op. cit.*, p. 2; G. Lanson, *Manuel bibliographique de la littérature française moderne, XVI^e, XVII^e, XVIII^e. et XIX^e siècles*. T. I, Paris, Hachette, 1921 (nouvelle éd.), p. 65. ヴィレーは1615年の版本以後の最初の版は1702年刊のものであるとしたが(P. Villey, 《Tableau chronologique des publications de Marot》 (Bibl. B49), p. 149, n. 3), 後にこれを訂正している(id., *Marot et Rabelais* (Bibl. C15), p. 404, n. 2)。

(5) マロ批評史上特筆すべき位置にあるラングレ=デュフレノワ版については、後段で詳述されよう。

(6) 《Comme les changements survenus dans notre langue ne nous empêchent pas de lire encore avec plaisir les morceaux que Marot a composés dans la sphère de son génie, qui n'était pas propre aux grands ouvrages, ils ne nous empêcheraient pas aussi de lire les œuvres de ses contem-

このように、マロが親しく繙かれ、その名声を啓蒙の世紀にも馳せていたことを示す証言は枚挙にいとまがないけれども⁽⁷⁾、1750—1780年に亘る中産階級⁽⁸⁾——貴族、聖職者、司法官、医者、官公吏等——に於ける個人所有の文庫目録もマロ詩の流布を考えるうえで何らかの手掛りを与えてくれるだろう。この500の文庫目録を詳細に調査したダニエル・モルネ Daniel Mornet に依ると、252の個人書庫がマロ作品集を所蔵しており、ときには数種もの版本を所蔵していた。その総計は367冊にも及び、これはビュフォン Buffon や ヴォルテールにもまして、18世紀の《grands livres》の筆頭に据えられるべき冊数であった⁽⁹⁾。ベールの辞典が288の個人書庫（総計299冊）に所蔵されていて一頭地を抜いているものの、ヴォルテールの著作集は173（総計207冊）の、ロンサールに至っては僅か56（総計60冊）の個人書庫に所蔵されているにすぎない。これらの数値から、マロが18世紀の人々に如何に愛読されたかの例証を導き出すことはなるほど容易であるかもしれない。また、このモルネによる調査——「文学の社会学」の礎を築いた⁽¹⁰⁾——が種々の不備と問題点を孕んでいること

porains(...). Le règne de François I^{er} produisit une grande quantité de poésies, mais celle de Cl. Marot et de St. Gelais sont presque les seules dont on lise quelque chose aujourd'hui.》(Du Bos, *Réflexions critiques sur la poésie et sur la peinture* (1719), cité par W. de Lerber, *op. cit.*, p. 8). 因みに、サン＝ジュレーの詩集は1719年にクゥストリエ Coustelier 版が刊行されている（それ以前では1656年版）。Cf. M. de Saint-Gelais, *Œuvres complètes*, éd. P. Blanchemain. T. I. Nendeln/ Liechtenstein, Kraus Reprint, 1970 (1873), pp. 33-42. このクゥストリエによるフランス詩人叢書は、サン＝ジュレーの詩集も含めて、当時は大成功を収め、多くの読者を得たようである。これについてはD. モルネの論文（後出、註(8)を参照）を見よ（pp. 481-482）。
(7) たとえばフォルメ Formey はマチュラン・レニエとマロの2人が依然名声を恣にしていると述べている：《Les deux Auteurs de ce temps là qui ont conservé le plus de réputation sont les Satyres de Régnier et les Œuvres de Clément Marot. On en a de très belles éditions in 4.》(cité par W. de Lerber, *op. cit.*, p. 10.)

(8) 《Ils peuvent représenter assez sûrement l'état d'esprit d'un groupe social considérable, celui qui réfléchit et discute.》(D. Mornet, 《Les enseignements des bibliothèques privées (1750-1780)》, *RHLF*, XVII, 1910, p. 454.)

(9) *Ibid.*, p. 481.

(10) Cf. C. Pichois, 《Ronsard au XVIII^e siècle》, *Œuvres et Critiques*, VI, 2, 1981-1982, p. 68, n. 4.

も既に指摘されてはいる⁽¹¹⁾。しかし、マロ作品集がベールの辞典に次いで多くの個人書庫に蔵されていたという調査結果から、「18世紀に於けるマロの影響が最も深甚かつ豊饒なもののひとつであった」⁽¹²⁾とは断言できぬまでも、その勢いの有りようを知るよすがとすることは許されるであろう。

では、18世紀にもてはやされた私たちの詩人はどのように読まれたのだろうか。

ソーニエ V. L. Saulnier の提示に従って、当時の文芸批評界を3つのグループに分類することができよう。即ち街学者《cuistre》、「哲学者」《philosophes》、社交界人士《mondains》である⁽¹³⁾。グージェ師 abbé Goujet (1697-1767) に代表される第一のグループと、ヴォルテール Voltaire (1694-1778) に代表される第二グループについては、追って後段で詳細に採り上げられるだろう。ここではさしあたって、第三のグループの典型的人物とも言えるジャン＝バチスト・ルッソー Jean-Baptiste Rousseau (1671-1741) のマロ観を瞥見しておきたい。ヴォルテールをして「エピグラムはマロのものより丹念にできている」⁽¹⁴⁾と言わしめたルッソーは、マロ宛の形式をとった書簡詩の中で、自らの師として詩人の名を挙

(11) Cf. par ex. R. Darnton, *The literary underground of the Old Regime*. Cambridge (Mass.), Harvard U. P., 1982, chap. 6: 《Reading, writing and publishing》. 個人の文庫目録査定には、ダーントンの依れば、主に3つの難点がある。1) 自分の所有する書物を悉く読破する人はめったにいないものではなく、たいていはマントの下に隠して流布された禁本を読み漁った。2) 書庫は何世代にも亘って築かれたものであるから、ある時期の読書傾向を示すどころか、かえって《archaic》なものである。3) 18世紀の書庫は競売に付されるので、非合法の書物が含まれていないかどうか検閲された。その検閲が不全であれ、それは競売に付された文庫目録から多くの思想書が除外されるに十分な影響力をもっていたかもしれない (*ibid.*, pp. 177-178)。これらの理由から、文庫目録の数値に必ずしも全幅の信頼をおくことはできないのである。しかもモルネの調査は1750-1780年の30年間に限定されており、この期間の以前と以後では、事情もまた異なってくる事が予想されよう。

(12) D. Mornet, *art. cit.*, p. 481.

(13) V. L. Saulnier, 《La réputation de Ronsard au XVIII^e siècle et le rôle de Sainte-Beuve》, *Revue universitaire*, LVI, 1947, pp. 92-97.

(14) Voltaire, *Le siècle de Louis XIV*, éd. A. Adam. T. II, Paris, Garnier-Flammarion, 1966, pp. 56-57. ダランベール D'Alembert も J. -B. ルッソーは「エピグラムと書簡詩に於てマロを顔色なからしめた」と記述している (『百科全書序論』 *Discours préliminaire de l'Encyclopédie*)。

げている：

Ami Marot, l'honneur de mon pupitre,
 Mon premier maître, acceptez cette épître
 Que vous écrit un humble Nourrisson
 Qui sur Parnasse a pris votre écusson,
 Et qui jadis en maint genre d'escrime
 Vint chez vous seul étudier la rime.
 Par vous en France, épîtres, triolets,
 Rondeaux, chansons, ballades, virelais,
 Gente épigramme et plaisante satire
 Ont pris naissance. En sorte qu'on peut dire:
 De Prométhée hommes sont émanés,
 Et de Marot joyeux contes sont nés.
 (.....)⁽¹⁵⁾

フランスで書簡詩，トリオレ，ロンドー，ジャンソン，バラッド，ヴィルレー，「愛らしいエピグラム」，「愉快な諷刺詩」が始まったのは《[son] premier maître》に負うと明言しているが，要するにルッソーは素朴な古いジャンルを愛好し⁽¹⁶⁾，マロ風の文体を援用したのである⁽¹⁷⁾。ルッソーのみならず，ジャン＝アントワヌ・デュ・セルソー Jean-Antoine Du Cerceau (1670-1730)，アントワヌ・ボードロン・ド・セヌセ Antoine Bauderon de Sénecé (1643-1737) 等がクレマン先生に愛着を抱いたのは，その「陽気な諷刺への嗜好」であり，「文体の優美な簡素さ」であり，「気取りのない才気」であった。こうした社交界人士のマロへの傾倒がか

(15) Cité par Y. Giraud, *éd. cit.*, pp. 487-488.

(16) 《[Rousseau] a annoncé une renaissance marotique qui se manifeste un peu partout, secrètement, dans les épigrammes et madrigaux de l'époque.》(Robert Sabatier, *La poésie du XVIII^e siècle*. Paris, Albin Michel, 1975, p. 25.)

(17) もっともヴォルテールはマロ風の文体の乱用を強く戒めている：《[Rousseau] aurait corrompu la langue française, si le style marotique qu'il employa dans ses ouvrages sérieux avait été imité. Mais, heureusement, ce mélange de la pureté de notre langue avec la difformité de celle qu'on parlait il y a deux cents ans n'a été qu'une mode passagère.》(*Le siècle de Louis XIV*, *éd. cit.*, t. II, p. 57.)

えって反^{アンチ}ロンサールの気分を煽ることになる。18世紀がロンサールにとってマロとの確執の世紀であると評したのはソーニエだが⁽¹⁸⁾、けだし言いえて妙である。マロ詩の特質の一部が18世紀社会の嗜好に合致したと言える：《Clément Marot réapparaît dans ce siècle qui n'en retient que les petits genres》⁽¹⁹⁾。

ところで、J. -B. ルッソーのマロ讃をもう少し注意深く検討してみると、そこに17世紀、就中ボワローの翳を見出すであろう。マロによるロンドーやバラッドの如き古いジャンルの創始という論点はとりもなおさずボワローの論点でもあったからだ⁽²⁰⁾。こうした類のトートロジーはルッソーばかりでなく、街学者や「哲学者」にも散見される。18世紀の主たる特徴が前世紀の古典主義的美学を再認することにあったのだから⁽²¹⁾、17世紀の好尚を信奉したとて不思議なことではないかもしれない。ルッソーにせよ、ヴォルテールにせよ、グージェにせよ、等しくボワローに耳をそばだてている。端的に言って、17世紀ではマロを《badinage》と野卑とを併せ持った詩人とする見方が支配的であった⁽²²⁾。その興味深い例証として、ローラン・ボルドロン Laurent Bordelon (1653-1730) のマロ批評を引くことができる。ボルドロンはフォントネルとボワローの意見を借用しつつ、マロの詩人としての技量を語る：

Quoi qu'il n'eût appris aucune Langue, ny aucune Science, il ne laissoit pas d'exceller dans la Poësie, pour laquelle il avoit un genie naturel. On l'appelloit à cause de ce talent, le Prince des Poëtes, & le Poëte des Princes. A voir sa mine serieuse & grave, on n'eust jamais crû qu'il eust badiné en Vers aussi finement qu'il faisoit. ⁽²³⁾

(18) Voir V. L. Saulnier, *art. cit.*, p. 95.

(19) R. Sabatier, *op. cit.*, p. 40.

(20) 拙稿(Ⅱ), 636頁参照。

(21) Cf. R. Naves, *Le goût de Voltaire*, Genève, Slatkine Reprints, 1967 (1938), p. 424.

(22) 拙稿(Ⅱ)を参照されたい。

(23) L. Bordelon, *Diversitez curieuses en plusieurs lettres, augmentées d'une Lettre pour servir de Response aux Sieurs Gacon & de l'Homme*. Tome II, Amsterdam, André de Hoogenhuysen, 1699, p. 252.

フォントネルの判断を殆どそのまま利用したのに続いて⁽²⁴⁾, ボワローの定義, 「マロの優雅な洒落を見習おう」が引用され, 再びフォントネルの表現を用いて言う:

Son style est net, facile, enjoué, & fort naïf. Il fit fleurir dans son temps les Balades, les Rondeaux, & d'autres sortes de petites Poësies, dans lesquelles il excella particulièrement.⁽²⁵⁾

そして再びボワローの引用⁽²⁶⁾が続く。以上は, つまるところ, 《badinage》に長けた詩人という見方の表明である。ところがこれに続いて, マロの下品さが指摘される: 「エピグラムとロンドーは高く評価された。だが作品を《ordures》と《obscenitez》で汚すことがなかったら, 彼はもっと評価されたであろうに」⁽²⁷⁾。ただしここでの下品さはラ・ブリュイエール流の意味ではなく, もっと思想的な色合いを濃く帯びている。つまり冒瀆に繋がるものとしてである。それでボルドロンはピエール・ジュリュ Pierre Jurieu (1637-1713) の『カルヴァン派史と教皇教史の比較論』*Histoire du Calvinisme & celle du Papisme mises en parallele*の一節(第1部第7章)を引用しているのである:

Comme Marot étoit un Poëte, & un Poëte de Cour; ce caractere est à peu près incompatible avec le grand merite. La Poësie amollit les ames, & les Poësies de la Cour ont pour but de flater & d'embraser les cœurs des passions impures. Les occupations de ces sortes de gens sont opposées à l'esprit du Christianisme; & on peut compter les Poëtes de Cour entre les Ministres des voluptez; caractere qui est odieux dans l'Eglise. La Jeunesse pleine d'esprit, de feu, & de passions emportées, & souvent criminelles, donne là-dedans: Mais l'esprit de grace ne repose point dans les ames qui ne s'occupent qu'à tourner un Sonnet

(24) 拙稿(Ⅱ), 641—642頁に引用したフォントネルの原文と比較せよ。

(25) L. Bordelon, *op. cit.*, p. 252.

(26) 拙稿(Ⅱ), 636頁に引用の詩句。

(27) L. Bordelon, *op. cit.*, p. 253.

en faveur de Philis, à composer une Ballade, & à dire des sottises de bonne grace. Marot étoit assurément ce que sont tous ces honnêtes gens du Monde, qui s'érigent en Auteurs par des Romans, par des Comedies, & par des Poësies effeminées. Marot étoit un esprit libre & libertin, qui s'étoit nourri de vanitez dans une Cour souverainement corrompuë. ⁽²⁸⁾

アンジュリユ
 雑言家ジュリユの言葉を受けて、ボルドロンは不信心者としてのマロ像
 リベルタン
 を打ち出している: 《son esprit libertin se fait connoistre dans ses Plaisanteries sur les choses les plus saintes & les plus sacrées》⁽²⁹⁾。

このように、ボワロー、フォントネル、ジュリユを援用しながら、17世紀のマロ観をボルドロンは如実に示しているように思える。18世紀は微妙な差異を見せながらも、17世紀に確立したこのマロ観を継承していくのである。

18世紀は前世紀以上にマロの語法や文体——所謂「マロ風の文体」が問題となってくるが——に拘泥する。この背景にはおそらくフランス語がルイ14世の時代に最も純化され、完璧な状態に達したという当時の認識があったからである。フランソワ・シャルパンチエ François Charpentier (1620-1702) は『フランス語の優越について』 *De l'excellence de la langue française* (1683) と題する、デュ・ベレーの宣言書を連想させる著書で、フランス語が如何に豊饒であるかを整理して、フランス語があらゆる必要性に応えうるほどに完成の域に達していることを証明しようとした: 《la langue française est dans son état de perfection》⁽³⁰⁾。

このフランス語の完熟の認識が200年前の古くさいマロのフランス語を軽

(28) *Ibid.*, pp. 253-254. 本稿末尾の補註も参照されたい。

(29) *Ibid.*, p. 254. フランソワ・ガラス François Garasse は『エチエンヌ・パーキエ氏のフランス考並びに諸著作の研究』 *Recherche des recherches et autres Œuvres de M. Estienne Pasquier* (1622) で、マロに於ける《un badin》を《un athée》と結びつけている。Cf. M. de Grève, 《François Rabelais et les libertins du XVII^e siècle》, *Etudes rabelaisiennes*, I, Genève, Droz, 1956, p. 124.

(30) Cité par R. Naves, *op. cit.*, p. 73.

蔑する言辞を、たとえばヴォルテールに吐かせるのである⁽³¹⁾。だがその一方で、古い時代のフランス語がすたれてしまったのを惜しむ文人もいたことは記憶に留められてよい。それは新旧論争に一応の決着をつける裁定者の役割を果たしたフェヌロン Fénelon (1651-1715) である。『アカデミーへの手紙』*Lettre à l'Académie* (1714年執筆, 1716年刊) のフランス語の現状に関する項で、彼は不当にも遺棄された古語を使用することによって、またデュ・ベレーがかつて提唱したように新語を使用することによって、言語を豊かにするように要求する。彼の根本的な認識としてフランス語の貧困があるのだ。「私たちの言葉にはたくさんの語句が不足している。およそ100年この方、フランス語を純化しようとして、かえって拘束を加え過ぎ、貧しくしてしまったようにすら思える」とシャルパンチエと対峙する認識を提示した後、次のように続ける：

Mais le vieux langage se fait regretter, quand nous le retrouvons dans Marot, dans Amiot, dans le cardinal d'Ossat, dans les ouvrages les plus enjouez et dans les plus sérieux. Il avoit je ne sai [*sic*] quoi de court, de naïf, de hardi, de vif et de passionné.⁽³²⁾

フランス語の純化を目指して束縛を加え過ぎたために、文学語としてのフランス語は貧困になってしまった。そこへマロやアミヨやアルノー・ドッサ (1536-1604) の古き時代の優れた文章にめぐりあうと、古語がすたれてしまったのが惜しまれると記すのである。とは言え、言葉を豊かにしようとするかつてのロンサールの過度な試みにはフェヌロンも批判的であっ

(31) Voir par ex. *Lettre à Helvétius* du 4 déc. 1738: «Et voilà pourquoi tout le monde s'est jeté dans ce misérable style marotique, style bigarré et menaçant où l'on allie monstrueusement le trivial et le sublime, le sérieux et le comique, le langage de Rabelais, celui de Villon et celui de nos jours.»; *Conseils à un journaliste*: «Marot parlait sa langue; il faut que nous parlions la nôtre.». 『ルイ14世の世紀』の一節(註(17)に引用)も参照せよ。

(32) Fénelon, *Lettre à l'Académie*, éd. E. Caldarini, Genève, Droz, 1970, pp. 30-31.

た⁽³³⁾。このあたりに穏健で中庸を得たフェヌロンの精神を垣間見ることができよう。いずれにしても、フェヌロンにマロの文体の弁護者を見ることは可能である。

18世紀前葉、マロに最も多大の関心を寄せて多くの紙幅を割いた批評家のひとりにジャン＝ピエール・ニスロン Jean-Pierre Nicéron (1685-1738) がいる。そもそも前世紀末から18世紀初めにかけては文芸批評が飛躍的な発展を遂げる期間であり、各種の膨大な文学史的業績が発表された⁽³⁴⁾。全43巻から成るニスロンの『文芸共和国の著名人の歴史に役立つ備忘録』*Mémoires pour servir à l'histoire des hommes illustrés dans la république des lettres* (1727-1745) もそうしたもののひとつであり、ラクローワ・デュ・メヌ以来の最初の大規模な書誌であった。その編纂法は何ら確固たる方法に則ったものではないし、サバチエ・ド・カストル Sabatier de Castres (1742-1817) が指摘したように、ニスロンが資料を消化しきっていない憾みもあるものの⁽³⁵⁾、マロはその第16巻(1731)に約40頁に亘って採録されたのである。マロの項目では、書誌の部分が伝記の部分を上回る量を占めている。マロの生涯は手際よくまとめられてはいるが、誤謬はやはり多くて、特にバヴィアの戦いで詩人が腕に傷を負ったという記述が相変らず見られる。この挿話は16世紀末頃から伝説化されてきたものである。クロード・フォシェが未刊のマロの伝記(B. N. fr. 24726, f°37 suiv.)の中で詩人が幾度となく戦場に赴いたことを讃えており、そ

33) Cf. *ibid.*, pp.70-71. フェヌロンと同じ論法でフランス語の現状認識を示したのはルネ・ラバン(拙稿(Ⅱ), 637-638頁参照)である。デュ・バルタスとロンサールはフランス語になじまない方法で言葉を豊かにしようとしたために《barbares》に陥ったが、他方17世紀では言葉の純化に心をくだく余り、詩から《force》と《élévation》が剥奪され始めていると。Cf. R. Rapin, *op. cit.*, pp.53 et 54.

34) Cf. R. Fayolle, *La critique*. Paris, A. Colin, 1978, p.67 sqq.; R. Naves, *op. cit.*, p.112 sqq et p.432 sqq.

35) 《La vraie cause d'une telle bigarrure, est que le P. Nicéron employoit ses matériaux, sans se donner la peine de les digérer & de les refondre. (...) il se contenta de copier les Journalistes & les Biographes, vrai moyen de perpétuer les fautes & les erreurs.》(Sabatier de Castres, *Les trois siècles de la littérature française*. Tome III, Genève, Slatkine Reprints, 1967 (1778), pp.279 et 280.)

れ以降ボルドロンもベールも、後述するラングレ＝デュフレノワもグージェも、現代に至るまでの夥しい批評家・研究者たちが、マロのエレジー、《Quand j'entrepris t'écrire ceste lettre》を手懸りとして、詩人のパヴィア参戦を再説してきたのである⁽³⁶⁾。ニスロンによる文学的判断は先人の批評の反復であり、独自の意見となりえていない。文芸・言語の知識を欠いていたにも拘らず、詩人の才能によりフランス語を精錬するのに成功したこと、真似し難いマロ独自の優雅さがあること、古めかしくなった言葉にも拘らず、詩人の作品が広く流行していること等が指摘されるにすぎない：

Marot a été le Prince des Poètes de son temps; son genie étoit si heureux, que sans le secours des Belles-Lettres, & sans la connoissance des Langues Gréque & Latine, il a entrepris avec succès de purifier la Langue François, de la débrouïller, de la rendre traitable & intelligible, & de lui donner de l'ordre & de la methode. La finesse & l'enjoüement de son esprit paroît dans la plûpart de ses Ouvrages. Il a une grace inimitable à tout ce qu'il dit, & ses pensées les plus communes sont embellies par le tour qu'il leur donne. Son langage, qui a vieilli, n'empêche pas que ses Poësies ne soient toujours à la mode; & nos meilleurs Poètes s'en servent encore, lorsqu'ils veulent s'exprimer d'une maniere aisée & naïve.⁽³⁷⁾

これらがいったい如何なる伝統的解釈の再説であるか、所謂身元証明をする必要があるだろうか。「一般にどんな批評家も殆ど同じことを繰返して述べることしかないものだ」⁽³⁸⁾。これが真理であることは既に見てきたところであるし、これからもうんざりするほど思い知らされるだろう。上

(36) この議論については、cf. C. A. Mayer, *Clément Marot* (Bibl. Cl0), pp. 42-47.

(37) Nicéron, *Mémoires pour servir à l'histoire des hommes illustrés...*, t. XVI, Genève, Slatkine Reprints, 1971 (1731), p. 125. ニスロンはバイエの犯した誤謬を数個所訂正するとともに、ベールの『歴史批評辞典』のマロの項目を参照している。なおラブレーに関しては、ニスロン師は特筆すべき文芸批評家の地位を占めている。Cf. L. Sainéan, *L'influence et la réputation de Rabelais*, *op. cit.*, pp. 96-98.

(38) W. de Lerber, *op. cit.*, p. 10.

文に続けて、マロの詩作品には節度がとりはられて野卑な題材が散在するという「粗野な16世紀の時代の詩人たちに通底する欠陥」を、ニスロンは17世紀の批評（たとえばラ・ブリュイエール）に追隨して指摘する⁽³⁹⁾。さらに、マロ詩は一様にできばえがよいわけではなく、月並なものもあれば、わけの分らぬ意味不明のものもあるのだから、駄作は打ち棄てておいて佳作に注目すべきだと記す：

Il est vrai que la modestie & la retenuë ne sont pas toujours bien observées dans ses Ouvrages, & que l'on peut même dire que les talens de son esprit, son sel, le tour agréable, vif, aisé, ingénieux de sa Muse, ne se font jamais mieux sentir que lorsqu'il traite des sujets libres; mais c'étoit un défaut assez commun aux Poètes de son temps, que la grossiereté de leur siècle leur pardonnoit sans peine (...). Il est vrai aussi que toutes ses pieces ne sont pas d'une égale beauté; il y en a de fades, de plates, d'obscures, & où règne un veritable galimatias. Mais qui est le Poète qui réussisse toujours également? Il faut s'arrêter à ce qu'il y a de bon, & laisser le mauvais.⁽⁴⁰⁾

かなり詳細な解題付類別目録に列記されている版本は、マロの校訂した『ばら物語』と『ヴィヨン詩集』の版が各々1種、マロ詩集については16世紀に刊行された版が36種、17世紀刊行のものは2種、18世紀刊行のものが3種である。なかでも興味深いのは、著しく多くの紙幅を割いてラングレ＝デュフレノワの校訂による『マロ作品集』に関する若干の考察を行なっていることであり、詩人の用いたジャンルにそれぞれ短い評言を付していることである。前者について言えば、たとえば、マロの恋人にディアヌ・ド・ポワチエ Diane de Poitiers, 次いでマルグリット・ド・ナヴァール Marguerite de Navarre がいたとするラングレ＝デュフレノワ説

(39) ラ・ビザルディエール Mich. Dav. de la Bizardièrre は『古今作家たちの特性』*Caractères des auteurs anciens et modernes, et les jugements de leurs ouvrages* (1704) でたびたびマロに言及しているが、マロにあまり好意を抱いていないらしく、放縦な生活をおくったことでマロを咎めているし、詩作品の《sale-
tez》, 及びエピグラムと『詩篇』翻訳の《sales et grossières》な表現を非難している。Cf. W. de Lerber, *ibid.*, p.15.

(40) Nicéron, *op. cit.*, pp.126-127.

を逸早く根拠のないでたらめな想像力の産物として斥け (p. 128), またラングレ=デュフレノワ版は性急に準備されたために幾多の手落ち——誤植や句読点の誤り等——が散見されると指摘した (pp. 133-134)。併せてラングレ=デュフレノワ版の巻末に収録された「マロ作品年表」に、同校訂本の「序文」や註釈に書き記されていることと矛盾する事項のあること (p. 134), 校訂者がマロ作に帰した作者不詳の数篇の詩は実際にはマロのものとは見做し難いこと (p. 145) 等も剔出された。これらの批判は概ね正鵠を射たものであり、書誌学者としての批評眼の鋭さがここに窺われるかもしれない。他方、後者については、ニスロンはクリッシェとなったマロ批評を繰り広げるばかりだ。マロが手を染めたジャンルの中で、ニスロンが好意的な意見を表明したのは、書簡詩 (《grande beauté》), パラッド (《bien réüssi》), ロンドー (《Marot a excellé dans ce genre de Poësie, & on en trouve parmi les siens plusieurs inimitables》), エピグラム (《Marot excelloit encore dans l'Epigramme, & l'on trouve dans la plûpart des siennes la naïveté, la précision & le sel, qui en font toute la beauté》) である。これに反して、否定的なジャンルは、シャン・ディヴェール (《qui roulent sur des sujets de pieté n'ont rien que de très-médiocre, ce n'étoit point le talent de cet Auteur d'écrire sur de semblables matieres》), シャンソン (《peu de chose》), エトレンヌ (《[qui] n'ont rien que de commun》), エピタフ (《[qui] n'ont de remarquable que les ordures dont elles sont remplies》), シムチエール (《autres Epitaphes plus sérieuses que [les Epitaphes], mais qui ne valent guères mieux》), コンプラント (《Marot ne réüssissoit guères dans les sujets si sérieux; ainsi l'on ne trouve rien en tout cela qui mérite de l'attention》), そして『詩篇』の翻訳である⁽⁴¹⁾。最後のものについて、ニスロンはかなり長い解説を加えているけれども、その最終的

(41) *Ibid.*, pp. 136-140.

な判断は頗る否定的で、仏訳の試みは失敗であると断罪する：

(...) Marot ne connoissoit guères ses forces, quand il entreprit la traduction des Pseaumes; son esprit aisé & naturel pouvoit badiner agréablement, railler finement, répandre sur un stile naïf des agrémens inimitables; mais tout cela ne lui pouvoit être d'aucun usage pour une si grande entreprise; aussi peut-on dire qu'il y a échoué. On ne trouve point dans sa traduction la grandeur & la sublimité qui fait le caractere des Pseaumes; on y voit au contraire un stile plat, & souvent des expressions basses & même ridicules, & dégoûtantes.⁽⁴²⁾

とどのつまり、poète léger たるマロの本領は愉快で、機智に富み、揶揄をまじえた題材にあり、『詩篇』はもとより、コンプラントやシムチエールの如き荘厳高尚な性格をもつ分野には不相応だというのである。ここにエチエンヌ・パーキエとニスロンを隔てる長い時間を感じさせられるであろう。16世紀人の多くが嘆賞したマロによる『詩篇』仏訳の卓越性⁽⁴³⁾は17世紀人の教義的批評によって曇らされてしまい、今や18世紀人の味わい知るところではなくなったのである。上掲の文章は、2世紀に亘って公式化され単純化されて、枠組にはめこまれてしまった偏頗なマロ観を雄弁に物語っている。この傾向はまだまだ続くはずである。

ここで、ニスロンの言及するニコラ・ラングレ＝デュフレノワ Nicolas Lenglet-Dufresnoy (1674-1755) に校訂された『マロ作品集』*Œuvres de Clément Marot* (1731) に触れておきたい。これはクレマンの詩作品のみならず、父親ジャンと息子ミシエルの作品をも収録しており、さらには各種ブラゾン集成とマロ＝サゴン論争の諸テキストをも含む大掛りなものであった。クレマン・マロの詩テキストの校訂については、既にニスロンの指摘したところであるけれども、クレマンの筆によるものとはとても認め難い詩作品を大量に添加しているうえに、ラングレ＝デュフレノワが

(42) *Ibid.*, p. 144. 因みに、ニスロンは先行の批評家たちのように『詩篇』について口を閉ざしているという W. ド・レルベールの指摘 (*op. cit.*, p. 10) は正確でなく、実はかなり長々と叙述しているのである。

(43) 拙稿(I)を参照されたい。

マロ詩集を編むにあたり底本としたのは、詩人の死後数十年を経たトマ・ポルトー版(1596)——ピエール・ベールのお墨付の⁽⁴⁴⁾——であった⁽⁴⁵⁾。厳密な方法による原文校訂を経ないテキストとともに用心してかかるべきはラングレ＝デュフレノワの付した数多くの註釈であり、序文であり、巻末にある「マロ作品年表」である。特に「クレマン・マロの詩作品に関する歴史的序文」《Préface historique sur les Œuvres de Clément Marot》と題された論考は12折6巻本で142頁にも及ぶ長大なものである。その前半部(90頁)が詩人の伝記に当てられているが、その大部分はロンドー、エレジー、エピグラム等を駆使してマロとディアーヌ・ド・ボワチエ、マルグリット・ド・ナヴァールとの恋物語の仔細な創作に割かれている。このディアーヌ、マルグリットのマロ恋人説は後世に継承されて、1867年にシャルル・デリコー Charles d'Héricault が新たなマロの伝記⁽⁴⁶⁾を発表するまで、疑念が差し挿まれることは殆どなかった——もっともニスロンのように早くからこの説に疑問を投げかけた批評家もいないわけではないが⁽⁴⁷⁾。とはいえ、これほどの紙幅を割いてマロの生涯を再構成しようとする試みはラングレ＝デュフレノワをもって嚆矢とする。

「序文」の後半部は所謂作品論であり、校訂者のマロ観が最も顕著に呈示されている部分でもある。8章に区分されており、なかでも「クレマン・マロの詩人としての特性」《Caractere de Clément Marot comme

(44) 拙稿(Ⅱ), 645頁参照。

(45) この版の評価については, cf. P. Villey, 《Tableau chronologique des publications de Marot》, *art. cit.*, pp. 144-147. ラングレ＝デュフレノワがこの版本を超えることを意図していたのは第1巻の献辞に明らかである。

(46) デリコー編纂のマロ詩集(Bibl. A13)の劈頭に付された。

(47) さらに後述のグージェやミシュレ Michelet もこれに付け加えられるべきかもしれない。この《*mère aimable de la Renaissance*》に《*pur élixir des Valois*》を認めるミシュレは、そもそもマルグリットと詩人たちとの間に浮いた痴話があることを真向から否定している: 《*Tout ce qu'on a imaginé des amours de Marguerite avec son protégé Marot et autres poètes qui pour elle rimaient, mouraient par métaphores, n'a ni sens ni vraisemblance; c'est le langage du temps, fiction innocente et permise.*》(J. Michelet, *Histoire de France au seizième siècle*, éd. critique par R. Casanova [*Œuvres complètes*, éd. P. Viallaneix, t. VII], Paris, Flammarion, 1978, p. 336.)

Poëte》と題する第1章が私たちの注目を引く。まず、題材に応じてそれにふさわしい発想ができる、詩人の思考の柔軟性が指摘される。そうは言っても、マロは軽い小詩篇こそ偏愛するが、一方、崇高さと偉大さを追い求めるのは極力避けている。むしろ表現の流暢さ、自然な言い回し等を好んだのだ。マロはエレジー、書簡詩、バラッド、ロンドー、エピグラムに秀でたのであり、それらこそまさしく彼の作品の根底を成すものであると叙述してから、ラングレ＝デュフレノワは主要ジャンルの解釈を試みる。そこに格別の創見があるわけではないけれども。最初にエレジーが採り上げられる。エレジーとは恋人のつれなさを歎いたり、苦しみに悶々としながらも恋人の助けを懇請したり、愛する心情が感得できる優しい甘美さを表現したりするジャンルと定義したうえで、マロのエレジーがラ・シューズ伯爵夫人 Henriette de Coligny, comtesse de La Suze (1618-1673)⁽⁴⁸⁾ のエレジーよりも劣るが、他の詩人たちのものよりは優れていると評価する。書簡詩に関しては、ラングレ＝デュフレノワが最も高く賞讃するジャンルのひとつである。書簡詩の定義に続けて、マロへの称辞を羅列する：

[Les Epitres] sont susceptibles de toutes les façons de penser depuis le grand & le sublime jusqu'au familier & au burlesque. Tout y peut entrer, récits pompeux, caracteres heroïques, descriptions magnifiques, doctrine des mœurs, censures de vices, satires personnelles, fables & tableaux allégoriques, enjouement & badinage d'esprit, tendres sentimens: & tout cela se trouve, à peu de chose près, très-ingenieusement employé dans celles de Clement Marot. Mais le caractere satirique, les pensées délicates & naturelles, une ingénuité toujours noble, toujours bien entenduë a fait dire qu'il est le prémier de nos Poëtes, qui a sçu badiner agréablement avec les Princes.⁽⁴⁹⁾

夥しい書簡詩の中でも、とりわけ「獄舎より解かれるよう懇願すべく国王に宛てて」*Au Roy, pour le deslivrer de prison* と「王太子殿下に宛

(48) 《célèbre dans son temps par son esprit et par ses esprits》(Voltaire, *Le siècle de Louis XIV*, éd. cit., t. II, p. 285.)

(49) *Œuvres de Clément Marot*, éd. Lenglet-Dufresnoy, t. I, La Haye, P. Gosse & J. Neaulme, 1731, p. 103.

てて」*A Mgr. le Dauphin*, それに「盗難に遇った折に国王に宛てて」*Au Roy, pour avoir esté desrobé* が絶賛される⁽⁵⁰⁾。各ジャンルで佳作と愚作を個別に区分しながら解説していく方法は、ラングレ＝デュフレノワが好んで採用するところである。この選別法は、良きにつけ悪きにつけ、近・現代の詩華集（就中、学校用のアントロジー）の編纂法のひとつの範例となっただけでなく、陸続と出版される各種アントロジーに収録されるマロ詩は殆ど常に同じものという奇矯な現象が今日なお見られるのである。次に、バラッドについては、約半分の量にあたる8篇が優れているとし、ロンドーも廃れることなくラングレ＝デュフレノワの時代にも実作され続けていると記す。これらに反して、シャン・ロワイヤル等は甚だ不評であり、2, 3行の簡単な言及でかたづけられているし、シャンソンは流行を過ぎて人々の胸を打つものが何もないと断定される。書簡詩に並び賞されるのはエピグラムである：

S'il y a des pieces où le Poete se soit égayé avec esprit, & même avec une sorte de volupté, ce sont les Epigrammes. Ce genre de poésie convenoit beaucoup mieux à sa délicatesse que les grands sujets, auxquels sa vivacité naturelle ne lui permettoit pas de donner une longue attention. L'on peut dire aussi qu'il y a réussi, soit pour le familier, soit pour le satirique (...).⁽⁵¹⁾

他に、コンプラント、種々の翻訳、『詩篇』仏訳に言及されるが、いずれも新しい見解が披瀝されるに至っていない。ラングレ＝デュフレノワが評価するジャンルは、したがって、ニスロンの場合と大差がなく、軽妙な詩歌の伝統を保持して愛すべきジャンルに関心を注ぎ続けた18世紀の趣味にかなうものであった。第2章「クレマン・マロの詩の気品」《*Noblesse de la Poésie de Clément Marot*》では、マロが表現上の高雅を《*cette gentillesse & ce badinage, dont il est le père & le modele*》(p.

(50) メイヤー版 (Bibl. A9) に従えば、順に *épîtres* 11, 45, 25 に相当し、この3作品は現在でもマロの真価を十全に発揮した傑作と認められている。

(51) *Ed. cit.*, pp.109-110.

126) に横溢した詩篇に於てすら抛擲していないことを讃える。第4章は「マロ詩の流暢さ」《Facilité de sa poésie》と題される。流暢さはマロ風の文体を形成するマロ固有の特質である：

Cette agréable facilité, cette aisance naturelle de versifier qui coule de source; c'est ce que par reconnaissance on appelle encore *le stile de Marot*, tant il luy étoit propre. Tout y est dû au génie, & rien à la peine, au moins à une peine apparente & marquée.⁽⁵²⁾

第6章「作詩法の欠陥」《Défauts de sa versification》で母音重複等が摘発されるものの、極めて浅薄で取るに足らぬし、第7章「マロの脚韻の特徴」《Caractere de la Rime de Marot》もマロが同時代の如何なる詩人たちよりも脚韻法が正確であったとするだけで、何の情報ももたらししていない。ただラ・ブリュイエールのマロ批評を再録して⁽⁵³⁾、ラングレ＝デュフレノワが17世紀の文芸批評に追従しているのがはしなくも露呈しているのだが。かくして、序文の第2部はマロ詩の特質を詳説しているにも拘らず、多少の例外はあるにしても、まったく伝統的な解釈に終始していると断言できよう。しかしその問題とは別個に、ラングレ＝デュフレノワが学者的態度でもってクレマン・マロの詩作品を体系的に編み、かつてない多量の註釈を付して読者に提供しようとした事実は讃えられて然るべきである。参照依拠版として長い間重宝がられたこの版本のテキスト批判—— *authenticité* の問題も含めて——と序文が及ぼした後世への影響たるや甚大であって、最近に至るまでこれを超える信頼するに足るテキストが提出されなかったのである。幾多の欠点を抱えながらも、この18世紀の版本はマロ詩を能う限り緻密に提供しようとした点で、その欠点とともに重要な意味をもつのである⁽⁵⁴⁾。

ラングレ＝デュフレノワとニスロンの注目すべき仕事が公表された翌年

⁽⁵²⁾ *Ibid.*, pp. 129-130.

⁽⁵³⁾ 拙稿(Ⅱ), 639頁参照。

⁽⁵⁴⁾ マロ受容史上のラングレ＝デュフレノワ版の功罪については、cf. P. Villey, *art. cit.*, pp. 149-156.

(1732), エヴラル・チトン・デュ・チイエ Evrard Titon du Tillet (1677-1761) は『フランスのパルナソス山』*Le Parnasse françois* と題する浩瀚な書を上梓する。著者の意図するところはその序文で明らかにされているが、要するに、フランスに栄光をもたらし不滅の名声に輝く詩人と音楽家を称揚する記念碑を建てることにあった。ルイ大王の世紀にフランス詩は完璧に達したとの認識をもちながらも、ボワローの権威に必ずしも追従しないと表明し、当時としてはかなり大胆なロンサール讃美を唱えていた⁽⁵⁵⁾。が、事マロに関する限りでは月並な批評をさしはさんでいるにすぎない⁽⁵⁶⁾。屢々引用されてきたデュ・ヴェルディエの表現（「当時の君公の詩人にして詩人たちの君主」たるマロ）⁽⁵⁷⁾を彼も引いてから、サント＝マルトの言葉として、詩人は才能に恵まれており、古典文学の研究をしなくとも、またギリシア・ラテンの言語の知識がなくとも、フランス語を純化し、整理し、扱いやすく明瞭なものにし、しかも秩序と流儀を授けた、と讃える⁽⁵⁸⁾。続く一節は明らかにニスロンの剽窃である：

Son esprit libre, agreable & enjoué, paroît dans tous ses ouvrages remplis de pensées vives & ingenieuses; la modestie & la retenue n'y sont pas toujours bien gardées; mais c'est un défaut assez commun aux Poètes de son siecle. ⁽⁵⁹⁾

⁽⁵⁵⁾ Titon du Tillet, *Le Parnasse françois*. Genève, Slatkine Reprints, 1971 (1732), pp. 7 et 16.

⁽⁵⁶⁾ 参考文献としてチトン・デュ・チイエが掲げているものは、バイエ、モレリの辞典、フォントネル編の詩華集第1巻、ペールの辞典にすぎない。Voir *ibid.*, pp. 115-116.

⁽⁵⁷⁾ *Les bibliothèques françoises de La Croix du Maine et de Du Verdier*. Nouvelle édition revue, corrigée & augmentée d'un Discours sur le progrès des lettres en France, & des remarques historiques, critiques & littéraires de La Monnoye, du Président Bouhier et de Falconet, par Rigoley de Juvigny. Paris, 1772-1773; réimpr. Graz, Akademische Druck-u. Verlagsanstalt, 1969, t. III, p. 397.

⁽⁵⁸⁾ チトン・デュ・チイエ自身はサント＝マルト（シャルルなのかセヴォル Scévole なのか）の言葉と明記しているが、実はこれはニスロンの剽窃なのである。Cf. Nicéron, *op. cit.*, p. 125 (註³⁷参照)。私たちはこうした無神経さに屢々とまどろ。

⁽⁵⁹⁾ Titon du Tillet, *op. cit.*, p. 113. Cf. Nicéron, *op. cit.*, p. 126 (註⁴⁰参照)。

甚だ粗略なマロの生涯の紹介に続いて⁽⁶⁰⁾、後世のマロ評価を列挙している。何せ「当今の才人たちがこぞってマロの詩作品を高く評価した」のだから。実際に名前が引かれるのはシャルルヴァル Charleval, J. -B. ルッソー、そしてまたしてもボワローである。

Despréaux loue le genie brillant & badin de Marot, & l'élégance de son stile, en le proposant pour modèle à ceux qui veulent écrire d'une manière aisée & legere. ⁽⁶¹⁾

ボワローに必ずしも追随しないと反骨の気概を見せたものの、マロに関しては異論がないようで、ボワローの名高い定義（『詩法』第1歌）が相変わらず引用される⁽⁶²⁾。ボワローの評言を受けて、バラッドとロンドーの開花、ソネやマドリガルの復興とその近代的な形態の定着、マロ以前には無視されていた短詩の再発見、これらはいずれもマロに負うと記しながら、マロが詩作上最大の成果を収めたのはエピグラムであるとの認識に達する。マロ詩の中でも評価の分れるジャンルが存在したことは既に見てきたとおりであるが⁽⁶³⁾、チトン・デュ・チエはその評価を終局的にエピグラムに収斂させてしまった。エピグラムの典型をマロに見出すという一点のみが強調されるのである。エピグラマチストとしてのマロ像の完成。マロの手がけたジャンルはこのように多種多様であるにも拘らず、彼は常に筆の流暢さを感じさせる：

Tous les genres differens de Poësie qu'il a traitez & sur toutes sortes de sujets font connoître la grande facilité qu'il avoit à composer des Vers. ⁽⁶⁴⁾

チトン・デュ・チエにはとりたててあげつらうほどの斬新さがなかった。1745年に出版された2冊の書物に於けるマロへの言及もまたその点に

(60) マロのパヴィア参戦の言及がやはり見える (*ibid.*, p. 112)。

(61) *Ibid.*, p. 114.

(62) 拙稿(Ⅱ), 635—636頁に引用。

(63) たとえばニスロン, ラングレ=デュフレノワの項を参照されたい。

(64) Titon du Tillet, *op. cit.*, p. 115.

かけては同様である。そのひとつはエドム・マレ Edme Mallet (1713-1755) の『詩人を読むための原理』*Principes pour la lecture des poètes* である⁽⁶⁵⁾。「技倆のいろいろな魅力を超えてあるのは簡素である」の信条をもつマレがマロに讃辞を呈するのはある意味で当然であろう：

Cette aimable simplicité est bien au-dessus des prestiges de l'Art et des vaines subtilités du bel esprit. Depuis deux siècles à peine, compte-t-on trois ou quatre personnes, qui aient excellé dans ce genre, tant il est difficile d'y réussir. L'exemple de La Fontaine et de Rousseau montre cependant qu'il n'est point inimitable.⁽⁶⁶⁾

マロを「模倣することは難しい」とするのは常套句であったが⁽⁶⁷⁾、マレはラ・フォンテーヌとジャン＝バチスト・ルッソーを例に引いて、真似できないこともないとこれを逆手にとっているにすぎない。

もうひとつは、アドリアン＝クロード・ル・フォール・ド・ラ・モリニエール Adrien-Claude Le Fort de la Morinière (1696-1768) の大部な『詩篇解題、あるいはマロから今日の詩人たちまでの新名詩選』*Bibliothèque poétique ou nouveau choix des plus belles poésies depuis Marot jusqu'aux poètes de nos jours* である。ル・フォール・ド・ラ・モリニエールはこの詩華集にマロの詩を19篇収録する一方、詩人にあてた解説はフォントネルが前世紀末に刊行した詩華集⁽⁶⁸⁾のそれと酷似している。言語

(65) サバチエ・ド・カストルに依れば、この「一種の詩論書」はボワローの『詩法』の「長たらしい註釈」でしかない。Cf. Sabatier de Castres, *op. cit.*, t. III, p. 137.

(66) Cité par W. de Lerber, *op. cit.*, p. 7.

(67) 拙稿(Ⅱ), 643頁参照。

(68) フォントネル編の詩華集は1752年に12折判6巻本として刊行されるまで (cf. G. Lanson, *Manuel bibliographique...*, *op. cit.*, t. I, p. 51), たびたび版を重ねてきた。モルネの査定に依れば、1750—1780年の30年間に於ける500の個人所有の文庫目録中、82冊が数えられ、これは『百科全書』とまったく同数に及んでいる (cf. D. Mornet, *art. cit.*, p. 477)。この詩華集はフォントネル以降の批評家たちの参看指示の対象となっていることも思い併せると、18世紀にもよく読まれたと推測される。ル・フォール・ド・ラ・モリニエールの詩華集はそもそもフォントネルの《revision》を目指したものであったから (cf. A. M. Boase, *art. cit.*, p. 54), 双方に多くの類似点が散見されるとしても何ら不思議はないと言える。

と学問の知識を欠くマロは《un naturel si heureux pour la poésie》⁽⁶⁹⁾に恵まれたために、彼以前並びに同時代の詩人たちを凌駕しているとの評言は飽き果てるほどに聞かされてきたが、次の一節もフォントネルのマロ批評と異曲同工である：

[Marot] avait l'air fort sérieux et il ressemblait plutôt à un Philosophe austère qu'à un poète aussi ingénieusement badin qu'il étoit. Son stile est net, facile, enjoué et surtout fort naïf. Quant à sa traduction des psaumes, un esprit de parti plutôt que son génie propre semble l'avoir déterminé à ce travail, qui, à parler naturellement, étoit bien au-dessus de ses forces. Marot n'a qu'un stile et il chante du même ton les Psaumes de David et les merveilles d'Alix. C'est au moins le sentiment de M. de Voltaire.⁽⁷⁰⁾

マロの風采は剽軽な詩人というより哲学者の風貌に近いという人相学的意見にせよ、マロの文体に対する形容詞のレッテルにせよ、何らフォントネルの記述と変らない⁽⁷¹⁾。『詩篇』翻訳についても、それは詩人の力量を超える試みであったと軽く一蹴される。加うるに、神聖な『詩篇』を卑猥な詩の調子で翻訳したとして暗に仏訳に対して否定的意見を陳述する。これはヴォルテールの『趣味の殿堂』*Le Temple du goût*にある観点を援用したものである。

ヴォルテール（1694—1778）の名前が出たところで、文芸批評家としてのヴォルテールのマロ観に触れておく必要があるだろう⁽⁷²⁾。ヴォルテールの膨大な著作に於て、マロへの直接的言及はさして多くない。そもそも彼がマロ詩を熱心に繙いたとは決して思われない。ヴォルテールの時代から遠く溯れば溯るほど、その時代の文学への興味と読書欲は減じていった。16世紀からはモンテーニュ Montaigne, ラブレー, マロをかろうじて選

(69) W. de Lerber, *op. cit.*, p. 11.

(70) *Ibid.*

(71) 拙稿(Ⅱ), 642—643頁参照。

(72) ヴォルテールの項の記述に際して、レーモン・ナーヴの学位論文（既掲書）に負うところが大きいことを明記しておきたい。

び出す程度で、ロンサルなどには殆ど意に介さない。ルイ14世時代の優れた作家たちの文学を学ぶことで養われる洗練された「趣味」を墮落させる惧れがあったからである。フランス16世紀は整然たる芸術的時代とはヴォルテールに映っていなかった。古典主義的な美の理想の手ほどきをしたのはむしろイタリア・ルネサンスであって、フランスではまさしく17世紀を俟たねばならないと考えていたのである⁽⁷³⁾。この16世紀に対する根本的に否定的な態度のなかで、マロは具体的に如何なる価値判断を下されたのだろうか。1733年の出版以来、『趣味の殿堂』は大きなスキャンダルを巻き起した⁽⁷⁴⁾。それが趣味批評の最初的方法的試みの書であったからである。そこには注告も戒律も原理も説かれず、手短かな価値判断が見られるだけで、1733年版の標語《Nec laedere, nec adulari》にあるとおり、多くの作家たちを難詰する厳格さもなく、かといって盲目的な讃仰も差し控えているのだ。ヴォルテールは自己の文学体験を要約し、それを17世紀の偉大な作家たちの理想に忠実な趣味の選択に従って整理整頓してみせたのである⁽⁷⁵⁾。これら大作家たちとは、フェヌロン、ボシュエ Bossuet, コルネイユ Corneille, ラシーヌ Racine, ラ・フォンテーヌ, ボワロー, キノー-Quineault, モリエール Molière であり、彼らは殿堂の「天国」に鎮座する。一方マロは「煉獄」に位置している。ポリニャック枢機卿とロトラン師に伴われて著者は趣味の殿堂を参詣するが、神殿の附属図書館に入って、蔵書が殆どすべて新版であったり改版であったりするのを知る。それに依れば、マロとラブレーの作品は原稿5, 6枚に減らされ、ベールは1巻本に、ヴォワチュールは数頁に減らされている有様であっ

(73) Cf. *Dizionario critico della letteratura francese*, diretto da F. Simone, volume II, Torino, UTET, 1972, notamment pp. 977-978. このフランコ・シモーネ執筆の「ルネサンス」の項目は, F. Simone, *The French Renaissance. Medieval tradition and Italian influence in shaping the Renaissance in France*. Translated by H. Gaston Hall. London, Macmillan, 1969, pp. 29-36 に英訳で再録されている。

(74) Cf. R. Naves, *op. cit.*, p. 424 sqq.

(75) Cf. R. Fayolle, *op. cit.*, p. 64.

た⁽⁷⁶⁾。ところが死後出版のケール Kehl 版 (1784) では、このマロの評価がもう少し具体的になる：

Marot, qui n'a qu'un style, et qui chante du même ton les psaumes de David et les merveilles d'Alix, n'a plus que huit ou dix feuillets.⁽⁷⁷⁾

原稿の枚数は幸いにも 8 枚ないし 10 枚と微増してはいるものの、新たに『詩篇』翻訳が貶められている。ダヴィデの歌は崇高にして荘厳な性格をもっているにも拘らず、アリックスの登場する粗野な詩篇の調子をそのままに適用していることにヴォルテールは我慢がならなかったのである。先述のル・フォール・ド・ラ・モリエールもこのことについて引用していた次第である。マロの『詩篇』については『ルイ14世の世紀』でも再説されていて、洗練された高貴な趣味からすると、マロとベーズの仏訳は嫌悪感しか搔き立てないと記述する：

A mesure que le bon goût se perfectionnait, les psaumes de Marot et de Bèze ne pouvaient plus insensiblement inspirer que du dégoût. Ces psaumes, qui avaient charmé la cour de François II, n'étaient plus faits que pour la populace sous Louis XIV.⁽⁷⁸⁾

マロは数枚の原稿に縮められるほどの低い評価しか与えられなかったけれども、その主たる原因は詩人の「無信仰」と「野鄙」にあったようだ⁽⁷⁹⁾。とはいえ、全面的にマロを否定し去るのではなく、ある種の詩は読んで心愉快的ことを認めている。たとえば、「ギリシアの典雅が再認される」⁽⁸⁰⁾ エピグラムが数篇あるし、その真価が《facilité naïve》に存するようなロンドーも書かれていることを。なかでもマロの有名なエピグラム《Lors que Maillart, Juge d'Enfer, menoit》は、《voilà, de toutes les epi-

⁽⁷⁶⁾ Voltaire, *Le Temple du goût*, éd. E. Carcassonne. Genève, Droz/Lille, Giard, 1953 (2^e éd.), p.92.

⁽⁷⁷⁾ *Ibid.*, p.139.

⁽⁷⁸⁾ Voltaire, *Le siècle de Louis XIV*, éd. cit., t. II, p.94.

⁽⁷⁹⁾ W. de Lerber, *op. cit.*, p.18.

⁽⁸⁰⁾ Voltaire, *Dictionnaire philosophique*, article 《Epigrammes》.

grammes dans le goût noble, celle à qui je donnerais la préférence》⁽⁸¹⁾ と絶賛されている。ボワローの定言に変更を要求したのは、「アカデミーの就任演説」*Discours de M. de Voltaire à sa réception à l'Académie française prononcé le lundi 9 mai 1746* に於てであった:

Marot, qui avait forgé le langage de Montaigne, n'a presque jamais été connu hors de sa patrie: il a été goûté parmi nous pour quelques contes naïfs, pour quelques épigrammes licencieuses, dont le succès est presque toujours dans le sujet; mais c'est par ce petit mérite même que la langue fut longtemps avilie: on écrivit dans ce style les tragédies, les poèmes, l'histoire, les livres de morale. Le judicieux Despréaux a dit: «Imitez de Marot l'élégant badinage». J'ose croire qu'il aurait dit le naïf badinage, si ce mot plus vrai n'eût rendu son vers moins coulant. Il n'y a de véritablement bons ouvrages que ceux qui passent chez les nations étrangères, qu'on y apprend, qu'on y traduit; et chez quel peuple a-t-on jamais traduit Marot?

Notre langue ne fut longtemps après lui qu'un jargon familier, dans lequel on réussissait quelquefois à faire d'heureuses plaisanteries; mais quand on n'est que plaisant, on n'est point admiré des autres nations. ⁽⁸²⁾

ヴォルテールはマロ詩に題材と文体を区別する。マロがフランスで喝采を浴びたのは題材のゆえであり、品位のない文体が高尚なジャンルにまではびこっていることに強く抗議する。このことは「マロ風の文体」をマロ自身の切り拓いた《petits genres》と分ち難く結びつけることになり、マロが手掛けた他のジャンルから後世の目を離反させることにもなるはずである。マロ詩に「純朴」,「天真爛漫」の特徴を認めるヴォルテールは、さらに、ボワローの周知の定義を《naïf badinage》に改変すべきだと新たなレッテルを持ち出す始末であった。また、マロがフランス以外の国で殆ど知られていないとするのは誤りであろう。とりわけイギリスへの伝播は

(81) *Connaissance des beautés et des défauts de la poésie et de l'éloquence dans la langue française* (1749), in *Œuvres complètes de Voltaire*, éd. L. Moland, t. XXIII, Paris, Garnier, 1879, p. 376.

(82) *Œuvres complètes de Voltaire*, éd. cit., t. XXIII, pp. 210-211.

今日では広く容認されている事実だからである⁽⁸³⁾。

ヴォルテールはマロが「自然な茶化し」の範を示したことを評価しながら、他方、当時は優れていたにしても、その後は《fausse naïveté》⁽⁸⁴⁾の典型になったマロの文体を排斥する。ここに私たちは趣味の変遷を見ることができないだろうか。かつてはマロが純粋なフランス語の精錬に寄与したことが賞讃されたはずなのに、それがヴォルテールには容れられず、仕業と機智の《subtilité》よりも《naïf》、《simplicité》が上位に据えられるに至っては、ヴォルテールやマレとともに趣味の変革が生じ、マロの詩作品はそれに一役買っていたと考えられるのである⁽⁸⁵⁾。

新旧論争に於ける近代擁護がもたらした成果は文学史、文献解題等の開花であった。それは百科全書の世紀にふさわしいものであったが、概ねフランス作家讃へと志向していった。これらの収穫のうちでも特に注目すべきものは言うまでもなくクロード＝ピエール・グージェ Claude-Pierre Goujet (1697-1767) の『フランス書誌あるいはフランス文学史』 *Bibliothèque françoise ou Histoire de la littérature françoise* (1741-1756) である。街学者の典型とも言えるグージェ師はフランス文学の財産目録を作成して、その富を証明せんと意図したのである。マロには第11巻(1747)の50頁が割かれており、記述構成はニスロンのものとさほど異同がない。詩人の伝記に始まるが、その中でラングレ＝デュフレノワの提出したディアース及びマルグリットのマロ恋人説は、カトゥルス、ティブルス、ホラティウス、プロペルティウス等のローマ詩人の恋愛説にも似て、根拠のないまったくの虚構である、と異議を唱える⁽⁸⁶⁾。また「不信心で敬虔を

⁽⁸³⁾ Cf. par ex. S. Lee, *The French Renaissance in England* (Bibl. H40); L. Borland, *The influence of Marot on English poetry of the sixteenth century* (Bibl. G3); O. J. Reamer, «Spenser's debt to Marot» (Bibl. G21); D. Bentley-Cranch, «La réputation de Clément Marot en Angleterre» (Bibl. G2); A. L. Prescott, *French poets and the English Renaissance* (Bibl. G19).

⁽⁸⁴⁾ R. Naves, *op. cit.*, p. 346. Cf. aussi le *Siècle de Louis XIV*, éd. cit., t. II, p. 45.

⁽⁸⁵⁾ Cf. P. Villey, *op. cit.*, p. 150.

⁽⁸⁶⁾ Goujet, *Bibliothèque françoise*, t. XI, Genève, Slatkine Reprints, 1966 (1747), pp. 39-40.

題材としたものを書くに適さない」マロがダヴィデの『詩篇』を翻訳したのは失敗だったと決めつける。この条りは殆どニスロンの剽窃であるけれども、18世紀にマロの聖書翻訳が如何に不評であったかを確認する意味で、ここに引用しておくのも決して無駄ではあるまい。

(...) Marot, le profane Marot, ne connoissoit guères ses forces, lorsqu'il voulut s'essayer sur un sujet si sublime. Son esprit aisé, naturel, pouvoit badiner agréablement, railler finement, ajouter à son stile naïf des agrémens inimitables; mais cette naïveté devient plate, cet enjouement paroît fade, quand on l'applique sur un fonds aussi riche, aussi relevé, aussi magnifique que les Pseaumes.⁽⁸⁷⁾

『詩篇』に関しては、さらに「良識ある人々」の判断として、ヴォルテールが『趣味の殿堂』で示した批判をそのまま転用している⁽⁸⁸⁾。グージェがラングレ＝デュフレノワを大いに活用している点でも、ニスロンの場合と同様である。マロ作品集の校訂者に賛意を表してグージェは次のように述べる：

(...) la France n'avoit eu avant lui aucun Poëte qui l'égalât dans le genre de poésie qu'il avoit choisi; & cet éloge tombe principalement sur ses Epîtres, ses Ballades, ses Rondeaux, ses Epigrammes: car pour ses traductions, & même ses Elégies, il convient qu'il faut les compter pour peu de chose, du moins par rapport à ses autres ouvrages. (...) Quel heureux naturel pour la plaisanterie, quel élégant badinage, quelle charmante naïveté, quelle délicatesse de pensées, quelle fécondité d'imagination, quelle facilité, quel feu, quelle noblesse, quelle douceur, quelle correction!⁽⁸⁹⁾

瞠目すべきレットルの大行進だ。しかしこうしたマロ批評のクリッシェの羅列よりも、むしろボワローのマロ讃についてのグージェの評釈に注目して然るべきであろう。ボワローの「マロの優雅な洒落を見習おう」の一句を誤って解釈すべきでない、とグージェは注意を喚起する。真似るべきは

⁽⁸⁷⁾ *Ibid.*, p. 48. Cf. Nicéron, *op. cit.*, p. 144 (註42参照).

⁽⁸⁸⁾ *Ibid.*, p. 49.

⁽⁸⁹⁾ *Ibid.*, p. 51.

マロの表現ではなく、マロの自然さであり、思考の繊細さである：

Ce ne sont pas proprement les expressions de Marot que M. Despréaux nous recommande d'imiter, c'est ce beau naturel, c'est cette finesse de pensées qui hait le fard, & qui abhorre ces idées fausses qu'on ne nous présente souvent que pour nous éblouir sous les paroles les plus magnifiques.⁽⁹⁰⁾ Il n'y a point de stile qui permette dans l'expression cette grossiereté qui produit la corruption du langage, & qui flétrit tout ce qu'elle touche. (...) Cette épithète d'*élégant* jointe à *badinage*, dit plus qu'il n'en faut pour des esprits susceptibles des impressions du vrai beau.⁽⁹¹⁾

みだりに「マロ風の文体や表現」を排斥しようとするのではなく、ラ・フォンテーヌやジャン＝バチスト・ルッソー等がしたようにこの文体を用いるべきだとする。つまり「マロ風の文体」はそれにふさわしいジャンルの中でのみ適用されるべきなのだ。さらに、「マロの文体」と「スカロンのビュルレスク」の混同を戒めて、簡単な比較論を展開する。「一言でもってするならば、マロぶりの雅致とビュルレスクの綺想とを混同してはならないし、くつろいだ詩神の素晴らしい冗談と気紛れ詩人の嗤うべき無駄口とを混同すべきでもない」⁽⁹²⁾。かくてマロを模倣すべきなのはマロの精神であり、むやみに「マロ風の文体」を乱用するのを戒めているのである。次にもうひとつ、「マロがバラッドを流行させ、トリオレを詠みマスカルードを作り、規則正しいルフランにロンドーを従えさせて、詩作のまったく新しい道を示した」というボワローのマロへの称辞についても⁽⁹³⁾、訂正されるべき事柄があるとして意見を開陳する。その論旨は次のとおりである。

(90) この条りにグージェ自身は《Lettre de M. de la Soriniere, dans le Merc. de Juin 1740》と註記しているが、『メルキュール・ド・フランス』*Mercure de France* (1742年6月) 掲載の無名氏による「マロ風の文体に関する考察」《Réflexions au sujet du style marotique》の一節と酷似している。アメリカのルネサンス文学研究者グリフィンGriffinはこの文章をもってして、《élégant badinage》が《stylistic option》から《philosophical mandate》に変じたと指摘する。Cf. R. Griffin, *Clément Marot and the inflections of poetic voice*, *op. cit.*, pp. 263-264.

(91) Goujet, *op. cit.*, pp. 52-53.

(92) *Ibid.*, p. 54.

(93) 拙稿(Ⅱ), 636頁参照。

ボワローのこの批評は事実ではない。マロはサン＝ジュレーとともにフランスへのソネ導入には貢献したかもしれないが、マドリガルについてはそうは言えず、しかもこの名称すら知らなかったようであるし、ロンドーについて言えば、ボワローがそれをマロに帰したことは父親のジャン・マロにも当てはめることができるし、バラッドにしてもマロ以前に大いに用いられており、シャルル・ドルレアン Charles d'Orléans はマロ以上に秀逸な詩を書いている。マロがフランス詩に導入した新しいジャンルは相聞^{エグ}牧歌^{ローグ}なのだ⁽⁹⁴⁾。以上のグージェの見解は今日から見ても正当なものと言わざるをえないだろう。ボワローへの反駁に続いて、ラングレ＝デュフレノワがかつて叙述したマロの詩句の端正さをラ・ブリュイエールを引用しながら論じているけれども、結局グージェの辿り着く意見は限定されたあるジャンルでのマロの卓抜さと詩に散在する野卑の視座である。言うまでもなくこれはマロ批評の定り文句であった：

Marot excelloit dans les vers amoureux, & surtout dans les Ballades, dans les Epîtres, dans les Rondeaux, dans les Epigrammes, dans les Complimens galans, tels que ses Etrennes, dans cette satire douce & innocente qui ne tombe que sur des sujets imaginaires ou inconnus. Ce ne fut pas assez pour son ambition poétique. Il voulut aussi briller par l'obscénité qu'il devoit abandonner à ces génies infortunés, qui n'ont pour se distinguer que cette criminelle ressource. ⁽⁹⁵⁾

最後に書誌的文章が置かれてある。エチエンヌ・ドレによって出版された作品集(1538)が最初の真正なる完全版であると気づいていながら、グージェはポワトゥーのニオールで刊行されたフランソワ・ミズィエール版(1596)が「最も豊かで、最も見事に監修されている」⁽⁹⁶⁾と考へている。後者の版を底本として編まれたラングレ＝デュフレノワ版の解題は詳細をきわめ、この点でもニスロンのものと通底する。ラングレ＝デュフレノワの序文と註は正当な考察と有益な歴史的註記を含むことを容認したう え

(94) Goujet, *op. cit.*, pp. 54-55.

(95) *Ibid.*, p. 58.

(96) *Ibid.*, p. 61.

で、各詩作品が解説される。長篇諷刺詩「地獄」*L'Enfer* が賞讃され、書簡詩には長い説明が付される——もっとも見るべきものもないのだが。マロが関った多数のジャンルのうちでグージェが最も高く評価するものは、つまるところエピグラムでしかない。その簡潔さと自然さと皮肉の利いた機智のゆえに、このジャンルが最も愛読されていると記す：

(...) ses Epigrammes sont peut-être celles de ses poésies qu'on lit le plus, non-seulement à cause de leur brièveté, mais aussi parce que la plupart ont beaucoup de naturel, & qu'elles ont le sel que l'on exige de ce genre de poésie. Un lecteur chaste est obligé d'en passer un grand nombre où le Poète a porté la licence jusqu'à l'obscénité. ⁽⁹⁷⁾

保守的な批評というものはかくまでも権威ある先人たちの判断をただ繰返すしかしないのだ、ときには彼らの一語一語を反復しながら。

オーギュスタン・シモン・イラーユ Augustin Simon Iraitlh は『文学論争あるいはホメロスから今日に至る文芸共和国の変革の歴史に役立つ覚書』*Querelles littéraires ou mémoires pour servir à l'histoire des révolutions de la république des lettres, depuis Homère jusqu'à nos jours* (1761) でマロの2つの論争を扱っている。ひとつはマローサゴン論争であり、もうひとつはソルボンヌとの確執である。イラーユ師はヴォルテールの擁護者であり、サバチエ・ド・カストルの言に従えば、彼の著書の意図するところがヴォルテールを正当化することにあつたのだから⁽⁹⁸⁾、マロに下される文学的判断も大哲学者のそれと極めて似通つたものであつた。マロとサゴンとの諍の顛末を叙した章では、如何なる苦境にあつても絶えず陽気で冗談好きな宮廷詩人としてマロ像を想定している。しかし誤解を惧れずにあえて言うならば、彼の描くマロはあたかも人間の心の叫びと悲哀を歌うことができない愉快一辺倒の詩人であつたかの如くだ...

⁽⁹⁷⁾ *Ibid.*, p. 80.

⁽⁹⁸⁾ Sabatier de Castres, *op. cit.*, t. II, p. 358. サバチエ・ド・カストルはヴォルテール等の哲学者たちに憎悪の念を抱いていて、イラーユに対しても仮借なき非難を投げつけている。

Dans les vers où il représente sa triste situation, il laissoit toujours percer son humeur enjouée & plaisante. Ces peintures respirent, comme ses autres épîtres, la délicatesse & la naïveté. Personne n'écrit de cette manière aisée & piquante. Il a sur-tout réussi dans le genre épigrammatique. Sa plaisanterie est souvent d'un homme de cour. Aussi l'a-t-on également appelé le poète des princes, & le prince des poètes de son temps. ⁽⁹⁹⁾

エピグラムに卓越していること——詩人マロのエピグラマチストへの完全な収斂⁽¹⁰⁰⁾——, デュ・ヴェルディエが形容した表現の反復, 《enjoué》, 《plaisant》, 《délicatesse》, 《naïveté》, 《aisé》, 《piquant》等の17・18世紀のマロ批評に於ける紋切型形容。いずれもヴォルテールの時代に至るまでのマロの受容を辿ってきた私たちには馴染のものばかりだ。17・18世紀ではマロによる『詩篇』仏訳が非難を浴びるか, またはまったく黙殺されるかしてきたことは既に見てきたとおりであるが, イラーユは劃一的に容赦なき酷評をソルボンヌとの抗争の章で下している:

Ces pseumes, qui firent tant de bruit dans le temps, & qu'on comparoit à l'original, étoient bien loin d'y atteindre. Ils sont dénués de cette sublimité ravissante & de cette poésie d'expression qui le caractérisent. Etoit-il possible que Marot, dont tout le mérite consiste dans la finesse, dans un tour épigrammatique, dans un naturel unique à la vérité, mais dont les grands défauts sont un stile le plus souvent comique, trivial & bas, rendit l'harmonie & la noble simplicité de

⁽⁹⁹⁾ Irailh, *Querelles littéraires*, t. I, Genève, Slatkine Reprints, 1967 (1761), p. 106. なお別の個所では, マロが放縦な詩人であるとともに逸楽の詩人でもあると述べたり (*ibid.*, p. 112), 《le plus ingénieux, le plus piquant, le plus naturel & le plus agréable de son siècle》な作家としての名声, 《épicurien parfait》の名声を恣にしたと書いたりしている (*ibid.*, t. IV, p. 163)。

⁽¹⁰⁰⁾ 詩人マロにエピグラマチストだけを見る意見はジョゼフ・ド・ラ・ポルト Joseph de la Porte にも採用される: 《Marot est le premier en date des épigrammatistes français et peut-être en mérite. Sa Muse a du naturel, de l'enjouement, de l'énergie, mais elle se permet des libertés dignes d'un cynique. Les Juges les plus réservés seront forcés de convenir qu'il avoit beaucoup d'agrément et de fécondité dans l'imagination.》(*Nouvelle bibliothèque d'un homme de goût, ou tableau de la littérature ancienne et moderne*, cité par W. de Lerber, *op. cit.*, p. 14.)

l'Hébreu? D'ailleurs, il n'entendait pas cette langue non plus que le Latin. Boileau lui donne l'épithète d'*élégant*. Celle de *naïf*, selon M. de Voltaire, lui eût mieux convenu.⁽¹⁰¹⁾

マロの翻訳は明らかな失敗作であった。マロの美点が繊細さとエピグラム風の言い回しと自然さにあるからには、彼の低俗な文体はヘブライ語の原文の崇高さにふさわしくないのである。これが『趣味の殿堂』で表明されたヴォルテールの判断の敷衍であることは一目瞭然である。そして、宗教詩人としてのマロの視座の全き欠落。ここにマロの『詩篇』はマロ批評史上とどめを刺されたの感があろう。この訳業が見直されて再評価されるにはおよそ1世紀俟たねばならなかった。

1772年から1773年にかけて、16世紀の博識な文献蒐集家ラ・クロワ・デュ・メヌとデュ・ヴェルディエの文献目録『フランス書誌』*Les bibliothèques françoises*（同一書名ながら、協働の作業によるものではなく別個に出版され、前者は1584年刊、後者は1585年刊）がアントワーズ・リゴレー・ド・ジュヴィニー Antoine Rigoley de Juvigny (?—1788) によってまとめて出版された。これは、この2つの書誌を改訂し一書にまとめる計画を抱きながら果せなかったアカデミー会員ベルナール・ド・ラ・モノワ Bernard de la Monnoye (1641-1728) の遺志を継いで成ったものであった。16世紀の文献書誌の200年近く後の刊行は、これらがフランス16世紀を知るうえで、18世紀に於てもなお最良の文献上の道具であると考えられていたことを証するものであろう⁽¹⁰²⁾。

(101) Irailh, *op. cit.*, t. IV, pp. 166-167.

(102) Cf. C. Longeon, «Antoine du Verdier et François Grudé de la Croix du Maine», in *Actes du colloque Renaissance-Classicisme du Maine* (Le Mans 1971). Paris, Nizet, 1975, p. 213. この2人の書誌に関する最も新しく優れた研究である。他に, cf. id., *Ecrivains Foréziens du XVI^e siècle*. Saint-Etienne, Publications de l'Université de Saint-Etienne, 1970, pp. 288-316 (デュ・ヴェルディエに関して); G. Huppert, *L'idée de l'histoire parfaite*, traduit par F. et P. Braudel. Paris, Flammarion, 1973, pp. 193-200 (ラ・クロワ・デュ・メヌの書誌について)。ラ・クロワ・デュ・メヌのマロに関する記述は簡潔であり、批評家としての意見をいっさい介入させないのに対して (*éd. cit.*, t. I, pp. 156-157), デュ・ヴェルディエは短い判断と多くの抜粋を付

辞典や文学史の類が続出するなかで、アントワーヌ・サバチエ・ド・カストル Antoine Sabatier de Castres (1742-1817) の『フランス文学の3世紀,あるいはフランソワ1世から今日までの作家たちの精神便覧』*Les trois siècles de la littérature française ou tableau de l'esprit de nos écrivains depuis François I^{er} jusqu'à nos jours* は幾度も重版され——1772年の初版から1801年までに6版を重ねている——, 華々しい成功を収めた⁽¹⁰³⁾。「哲学者たちの危険な教義」⁽¹⁰⁴⁾に警戒心を抱くサバチエの文学的趣味は古典主義の原則に通じることが、この一種の「文学の百科全書」*enciclopedia letteraria* に透けて見える⁽¹⁰⁵⁾。マロの項目は、したがって、何の新奇な意見も含んでいない。マロは今なお読んでも何らかの喜びを与えてくれるフランス最古の詩人であり、その名を不滅にしているのは絶えず称揚され採り入れられた彼の文体である。詩人の言葉が切磋琢磨されていないにも拘らず、彼の詩は軽快にして優美繊細で、良き趣味の持ち主たちを楽しませる。ましてや、ラ・フォンテーヌやボワロー、ルッソー等の讃辞を勝ち得たのであれば、マロの作品の評価は約束されたようなものだ:

C'est à lui qu'on doit le modele d'un style plein de naïveté & d'agrément, qui consacrera son nom à l'immortalité. Rien ne prouve mieux le mérite original, que l'approbation constante & l'adoption générale. Marot possédoit, au plus haut degré, cette tournure d'esprit qui rend les plus petites bagatelles intéressantes. Malgré l'imperfection du lan-

している:《Marot, (...) Poète des Princes & Prince des Poètes de son âge, a si doucement écrit, & si gracieusement entassé les mots de sa composition, yssante, ou de son propre esprit, ou de l'esprit d'autrui, que jamais ou ne verra son nom éteint, ni ses écrits abolis. Un homme docte dit, en un sien Livre, qu'il souhaite aux hommes d'entendement & de savoir, pareille douceur, grace & facilité d'écriture, accompagnée de jugement, pour faire Œuvres dignes d'immortalité, comme sont celles dudit Clément Marot (...)》(éd. cit., t. III, pp.397-398)。

(103) Cf. *Dizionario critico della letteratura francese, op. cit.*, vol. II, p. 1054.

(104) Sabatier de Castres, *Les trois siècles de la littérature française, op. cit.*, t. I, p. xxxiii.

(105) *Dizionario critico della letteratura francese, op. cit.*, vol. II, p. 1054.

gage, ses Poësies sont légères, agréables, délicates, & surtout d'une finesse qui plaît infiniment aux personnes de goût. Ce n'est pas tant l'estime des Princes de son tems (estime qui le faisoit appeler alors *le Poëte des Princes & le Prince des Poëtes*) que l'approbation de Lafontaine, de Despréaux, de J. B. Rousseau, qui a perpétué sa réputation & l'estime de ses Ouvrages. ⁽¹⁰⁶⁾

だがマロにも回避しえない汚点があった。それはまたしても淫猥さであった。《Ses Contes sont quelquefois licencieux, ses Vers trop libres sur des objets qu'il devoit respecter.》⁽¹⁰⁷⁾ この淫蕩放縦が良き趣味人の眉をひそめさせ、不興を招いたのである。かくしてサバチエの筆鋒が『詩篇』翻訳の批判へと向かうのは自然の理である。この訳業がマロを高名にしたわけではない。プロテスタントは「奇怪に改作された」聖歌を歌唱したかもしれないが、良識ある人は《des Productions, où le naïf s'efforce en vain d'atteindre au sublime qui n'a rien de commun avec lui》を斥けた⁽¹⁰⁸⁾、とサバチエは記すのである。

18世紀に於けるマロ受容の流れをヴォルテールの弟子ジャン＝フランソワ・ド・ラ・アルプ Jean-François de La Harpe (1739-1804) で結ぶことは適當であろう⁽¹⁰⁹⁾。1786年から1788年まで一種の自由大学とも言ふべき機関のリセで、彼はあらゆるジャンルに亘る文学をその起源から同時代まで幅広く講義を行なった。ところが続いて起った大革命に参画した彼は恐怖政治の下で下獄の憂目を見てしまった。1794年に講義を再開し、その講義内容を1799年から1805年に亘ってまとめて公表したのが『リセ、あるいは古今文学講義』*Lycée ou cours de littérature ancienne et moderne* である。この講義録の「マロ以前及び以後からコルネイユまで

(106) Sabatier de Castres, *op. cit.*, t. III, p. 161.

(107) *Ibid.*, p. 162.

(108) *Ibid.*

(109) «his famous and influential *Cours de littérature* summarizes the standard literary judgements of a whole age, judgements which helped a great deal to form opinion in the first quarter of the nineteenth century and beyond.» (R. A. Katz, *op. cit.*, p. 149.)

のフランス語について」《De la poésie française avant et depuis Marot jusqu'à Corneille》と題された章に、私たちの詩人への言及が見られる。ヴォルテール流の「趣味」の原則で計測されたマロ詩とはどのようなものなのか。まず、マロの名前はフランス詩史に燦然と輝く最初の星であると讃える。それは彼がフランス詩の韻律法にもたらした進歩のゆえというよりは、彼の才能のゆえであったけれども：

Le nom de Marot est la première époque vraiment remarquable dans l'histoire de notre poésie, bien plus par le talent qui brille dans ses ouvrages et qui lui est particulier, que par les progrès qu'il fit faire à notre versification, progrès qui furent très lents et très peu sensibles depuis lui jusqu'à Malherbe. ⁽¹¹⁰⁾

彼の詩才はマレルブ Malherbe の出現まで余人の追随を許さぬものであったが、なかでも生来の優雅さが注目され、詩人の文体が実に魅惑的であると指摘する：

(…) il eut un talent infiniment supérieur à tout ce qui l'a précédé, et même à tout ce qui l'a suivi jusqu'à Malherbe. On remarque chez lui un tour d'esprit qui lui est propre. La nature lui avait donné ce qu'on n'acquiert point: elle l'avait doué de grace. Son style a vraiment du charme, et ce charme tient à une naïveté de tournure et d'expression qui se joint à la délicatesse des idées et des sentiments. ⁽¹¹¹⁾

ラ・アルプの時代ですらエピグラムの領域でマロを凌駕する者はいないし、5脚10音綴の律動を知悉したマロはこの律動に最適なジャンル、書簡詩にも秀でている。ボワローの定句化した《élégant badinage》は必ずしも正確でない。如何なる表現を用うべきかの選択の才量はマロの詩才に顕著なものとは言えないし、そもそも彼の言葉はまだ殆ど洗練されていないからである。むしろ《charmant badinage》と訂正さるべきであると

(110) La Harpe, *Lycée ou cours de littérature ancienne et moderne*, t. I, Paris, Didier, 1834, p. 437. (この版本の頁付けは間違いが多く、当該頁もp. 441と付けられている。以下の出典明示では訂正した頁付けを記す。)

(111) *Ibid.*

する：

Personne n'a mieux connu que lui, même de nos jours, le ton qui convient à l'épigramme, soit celle que nous appelons ainsi proprement, soit celle qui a pris depuis le nom de madrigal, en s'appliquant à l'amour et à la galanterie. Personne n'a mieux connu le rythme du vers à cinq pieds et le vrai ton du genre épistolaire, à qui cette espèce de vers sied si bien, C'est dans les beaux jours du siècle de Louis XIV que Boileau a dit: «Imitons de Marot l'élégant badinage». Il fut, sans doute, beaucoup plus élégant que tous ses contemporains; mais, comme le choix des termes n'est pas ce qui domine le plus dans son talent, et que son langage était encore peu épuré, on aimerait mieux dire, ce me semble: «Imitons de Marot le charmant badinage». ⁽¹¹²⁾

ここに、マロ詩の性格づけはボワローの《élégant badinage》からヴォルテールの《naïf badinage》を経て、ラ・アルプの《charmant badinage》にて完結する。V. L. ソーニエが喝破した如く⁽¹¹³⁾、けだしラ・アルプはボワローの定句をそのコンテクストに据えないで、かえって切り離して考えたために、このようなレッテルの交換に熱中したのであろう。しかし述べ来ったように、それはラ・アルプひとりの陥った誤謬ではなかったのである。よしんばボワローが《élégant badinage》に、「マロは洒落（《badinage》）を超えることができない」という意味をこめていなかったにしても、つまりこの定句はマロ詩の限界を指示するのではなく、ひとつの評価を指示していたにすぎないとしても⁽¹¹⁴⁾、後世はそのようには解釈しなかった。少くとも、限定の指定と曲解して受容していったのである。それがマロの神話を創出したにせよ、である。ラ・アルプは続けて、マロの作品の一部は今日でも大いに愛読されていると指摘する。マロはすべてに成功しているわけではないから選択する必要がある、ということなのだ⁽¹¹⁵⁾。そして失敗作として真先に槍玉に挙げられるのが、例により『詩

(112) *Ibid.*, pp. 437-438.

(113) V. L. Saulnier, *Les élégies de Clément Marot, op. cit.*, pp. 191-193.

(114) *Ibid.*, p. 192.

(115) これはラングレ＝デュフレノワの方針の踏襲である。

篇』翻訳であった:《Ses psaumes (...) ne sont bons qu'à être chantés dans les églises protestantes》⁽¹¹⁶⁾。秀作のお墨付を得て、詩句の一部ないし全部が引用されているのは、順に chans. 34, épig. 67, 106, 138, 46 (《c'est ce que Despréaux appelait le badinage de Marot》⁽¹¹⁷⁾), 43 (《c'est la seule où [Marot] ait soutenu le ton noble qui n'est pas le sien》⁽¹¹⁸⁾), élégie 16, ép. 25 である⁽¹¹⁹⁾。これらはいずれも後代のマロ詩選集に必ずといってよいほど収録されるものばかりである⁽¹²⁰⁾。他に、マロに関する記述の中で注目される点は、ラングレ=デュフレノワの驥尾に付して、マロとディアース・ド・ポワチエ、マルグリット・ド・ナヴァールとの恋愛物語を縷々述べていることと⁽¹²¹⁾、詩句の跨りの効果に触れていることであろう⁽¹²²⁾。最後に、マロは同時代の詩人たちを凌ぎはすれど、「趣味」に及ぼす影響力は微々たるものにすぎなかった反面、18世紀中葉に「マロチスムと呼ばれる流行」が発生するという「奇異な運命」をもつに及んだと記すとき⁽¹²³⁾、ラ・アルプはマロ風の文体の流行に大きな危惧と不満を明かしているのかもしれない。とまれ、それほどまでにマロの《tournure naïve》⁽¹²⁴⁾は魅力的だったのだ、と結ぶ。

古典主義理論の方法論的適用にすぎないラ・アルプの文学講義の影響力と権威は、18世紀末、特に19世紀前葉に極めて顕著なものがあった。したがって、そこに展開されたマロ観は19世紀になってもなお支持され続けることになった。旧套のマロ観から新たな地平が開けるのには、まだ多くの

(116) La Harpe, *op. cit.*, p. 438.

(117) *Ibid.*

(118) *Ibid.*

(119) 検索の便を計って、これらの番号付けはいずれもメイヤー版, t. I, III, V に準拠してある。

(120) 例の枚挙にいとまがないが、一例だけ挙げておく。Cf. L. P. D. [Edouard -M. -J. Lepan], *Œuvres choisies de Marot, Malherbe, Voiture et Segrais*. Paris, Allut, 1810.

(121) La Harpe, *op. cit.*, pp. 438-439.

(122) *Ibid.*, p. 440.

(123) *Ibid.*

(124) *Ibid.*, p. 441.

時間を要するのである。

結 語

かくて、マロの神話が生れた。

学問がなく、機智に溢れ、ときには卑猥な詩をものし、自然で流暢な、優雅で繊細微妙、軽口をたたき、揶揄し、明瞭で素直な文体をあやつる深みのない軽い詩人。これが17世紀から18世紀を通じて確立されたマロのイメージなのである。これはさらに、マロ詩には真摯なものを欠き、詩の役割についても卑俗な概念しかもっておらず——彼にとって詩とは嗜でしかない——、押韻派詩人の時代遅れのジャンルを後生大事にしているという誤解に結びつくはずであり⁽¹²⁵⁾、マロが中世最後の詩人だとか、詩をば何かを懇願するための機智に富んだ一手段でしかないと見做すおどけ者であるという神話に肥大していくのである。ワルテル・ド・レルベールの印象深い言葉を引用しておこう：

(...) les poètes du XVII et du XVIII^{me} siècle [*sic*] n'ont vu en Marot que l'auteur d'une poésie enjouée, plaisante, parfois même indécente ou trop libre; ils ont vu en lui aussi l'auteur qui a excellé dans certains genres spéciaux démodés aux XVII et XVIII^{me} siècles, tels les ballades, les rondeaux, les épîtres familières. Ils n'ont eu aucun sens de la beauté et l'élévation de certaines de ses poésies religieuses; ils ne se sont point rendu compte non plus de la profondeur de sa passion, telle qu'elle était révélée par ses poésies pour Anne.⁽¹²⁶⁾

書簡詩、ロンドー、バラッド、エピグラムに依拠して作りあげられたマロ観のために、マロは19世紀に容易には受け容れられなくなるだろう。ロマン主義の息吹を伝えるラマルチャーヌ Lamartine は大革命の衝撃から立ち直りつつある社会に詩の復活と未来を説いていた。これからの詩は個人

(125) Cf. Mayer, *Clément Marot* (Bibl. C9), p. 36; id., «Clément Marot and literary history», *art. cit.* 後者の論文で、メイヤーはこれらのクリッシェとなった非難に逐一反論を加えている。

(126) W. de Lerber, *op. cit.*, p. 122.

的で、瞑想的で、荘重であらねばならない。もはや才智の戯れの表現形式としての詩であってはならない：

Depuis J. -J. Rousseau, Bernardin de Saint-Pierre et Chateaubriand, c'était le poète qu'il attendait. Ce poète était jeune, malhabile, médiocre; mais il était sincère. Il alla droit au cœur, il eut des soupirs pour échos et des larmes pour applaudissements. ⁽¹²⁷⁾

明らかに、19世紀初頭の公衆が希求する詩人と神話化されたマロとでは相容れない対峙関係にある。この齟齬は19世紀に於けるマロの相対的な不遇を示唆するであろう。事実、マロの真の復活は私たちの世紀に入ってからのことである。17・18世紀をくぐり抜けてきたマロと、本論劈頭に例示した3冊の学校用文学史提要で説明されたマロ⁽¹²⁸⁾が何故同じ像を結んでいるのか、今理解できるのではないだろうか。

(1982年8月—1983年8月)

(127) 《Première préface des Méditations》, in Lamartine, *Méditations*, éd. F. Letessier, Paris, Garnier, 1968, p. 309.

(128) 拙稿(I), 472—473頁参照。

(註28の補註) ボルドロンに依るジュリュの引用は原文に忠実なものではない。Voir P. Jurieu, *Histoire du Calvinisme & celle du Papisme mises en parallele : ou Apologie pour les reformateurs, pour la reformation, & pour les reformez*. Tome I. Rotterdam, Reinier Leers, 1683, pp. 256-257. 因みに同書中の、「フランソワ1世の宮廷の頹廢」の中で育った「クレマン・マロのための弁明」はマンブールの『カルヴァン派史』への反駁の形をとっている。Cf. Maimbourg, *Histoire du Calvinisme*. Tome I. Paris, Sebastien Mabre-Cramoisy, 1682, pp. 140-145.

(付記) 本論執筆にあたり、東京都立大学助教授野沢協氏には貴重な助言と激励を賜った。ここに謝意を表したい。